

アイヌ民族の「戦略」からみる同化と文化継承

北海道大学大学院 木戸調

1. 目的

2019年4月19日、いわゆる「アイヌ民族支援法」が成立し、アイヌ民族とその文化の動向に注目が集まっている。その背景には戦前に生じたとされる同化という問題があり、だからこそ主体的なアイヌ文化継承を行うための法や場の整備が必要とされているという事情がある。これと対応して、同化と継承の問題にかかわる研究は、アイヌ民族が歴史的に同化せざるを得ない状況に追い込まれていったことを指摘する研究と、戦後において特に観光地の中でアイヌ文化を誇れるものとして捉えなおしながら主体的に継承していったことを指摘する研究に大別される。しかしこの2つの立場の研究からは、アイヌ民族が戦前において同化していったにもかかわらず、なぜ戦後においてアイヌ文化を継承することができたのかについて明らかにすることができない。同化と文化継承の両方を捉えられるような新たな枠組みが必要なのではないか。

2. 方法

その枠組みを考えるに際して、和人風の暮らしをするようになり、生活が良くなったとするアイヌ民族の語りが残されていることを考慮すべきだろう（『エカシとフチ』編集委員会編 1983）。そのため、まず同化を現象として、価値中立的に考える必要があるのではないだろうか。そこで本報告では、同化を現象として捉えようとしたアメリカの新同化主義的な移民研究を参考にしつつ、現象としての同化を出発点とし、アイヌ文化継承を同時に捉えることができるような枠組みを考察する。

3. 結果

新同化主義的な移民研究は現象としての同化を、移民が自らの置かれた状況に対応するために行う「戦略」によって、意図的にも意図せざる結果としても生じるもの、として把握している。また、従来のアイヌ民族研究が同化としてきた文化的な同化や婚姻による同化だけでなく、構造的な同化（私的な相互の交際が大規模に行われていること）や、社会経済的同化（労働市場にマジョリティと対等に参入していること）、居住の同化（エスニックな集住地を作らずマジョリティと混住していること）などの諸側面も分析の対象としている。つまり、移民の同化を様々な側面から把握し、どのような「戦略」によって移民は意図的に、あるいは意図せざる結果としてアメリカ社会への同化を果たしていくのかを明らかにしようとしている。ただし、このような問題意識のため、マイノリティの文化の継承は中心的に扱われておらず、そのままアイヌ民族の分析に適用することは難しい。

4. 結論

しかし、「戦略」の結果として意図的にも意図せざる結果としても同化が生じるのであれば、文化の継承もまた「戦略」の結果として意図的にも意図せざる結果としても生じるのではないかと考えられる。その代表例が、観光地におけるアイヌ文化継承なのではないだろうか。収入を得るための手段であった「アイヌ踊り」が、アイヌ民族としてのアイデンティティを喚起し、最終的に継承すべきものへと変化していったことを示すような語りが残されている（『エカシとフチ』編集委員会編 1983）。そうであるとすれば、新同化主義的な移民研究が用いている、状況に対応するための「戦略」という視座から、同化と継承の両方を捉えることができるのではないだろうか。

文献

『エカシとフチ』編集委員会編、1983、『創立25周年記念出版 エカシとフチ——北の島に生きたひとびとの記録』札幌テレビ放送。